

## ＜追 悼＞

### ハインツ・ベツヒェルト先生を偲ぶ

松 村 淳 子

Heinz Bechert 先生（1932年6月26日～2005年6月12日）は、ドイツのゲッティンゲン大学インド学研究所の教授を1965年から2000年までという長期間に渡って務められた、20世紀を代表するインド学・仏教学の世界的な権威のお一人と言えよう。筆者はその中間期ともいべき1985年から1990年までの間、ご縁あって先生の指導のもと、博士学位論文を執筆するという幸運に恵まれた。その5年間の思い出は、ベツヒェルト先生、夫人、そして同じ研究所に所属する研究員や学生仲間、そして日本人を含む多くの来訪者の方々の思い出とともに、筆者の人生の非常に大きな一頁となっている。

ゲッティンゲン市は、こぢんまりとした古い大学町（筆者が滞在中の1987年には創立250年が祝われた）である。城壁に囲まれた中心部に旧市庁舎があり、その前の広場にはグリム童話の「鶯鳥番娘（ゲンゼリーゼル）」の銅像が立っており、博士の口頭試験に合格すると「焼き立てほやほやの博士」が鶯鳥番娘にキスをするという風習が今も生きている。そのゲッティンゲン市東部の緑豊かな閑静な住宅街 Hainbundsstraße 21 にあった研究所は、1957年に先代のヴァルトシュミット教授が私宅を大学に寄贈されたものであり、ベツヒェルト教授時代のゲッティンゲン大学のインド学・仏教学は、この美しく居心地の良いヴァルトシュミット・ハウスと共にあった。ベツヒェルト教授の退官後まもなくこの建物は大学の経営合理化の一環として売却されてしまい、研究所は、今は大学病院向かい側の大学本部に引っ越ししてしまった。研究所の各部屋や地下にぎっしりと詰め込まれていた書籍や資料は、新しい研究所のスペースに収まりきらず、大学図書館、部局図書館、そ

の他に分散してしまったことも惜まれる。

ゲッティンゲン大学のインド学講座は1826年にエーヴァルトが「サンスクリット語とその文学」と題する講義を開始したのを嚆矢として、テオドル・ベンファイ、フランツ・キールホルン、ヘルマン・オルデンプルク、エミル・ジーク、エルンスト・ヴァルトシュミットという、いずれも名高く貴重な業績を遺された歴代教授によって受け継がれてきた。とりわけヴァルトシュミット教授は、ドイツ・トルファン探検隊がベルリンにもたらした写本やその他出土品の研究の拠点を、ゲッティンゲンのアカデミーにも置き、「ドイツにおける東洋写本カタログ化・プロジェクト (die Katalogisierung der orientalischen Handschriften in Deutschland)」および、その一環としての「トルファン出土仏教文献のサンスクリット語辞典編纂プロジェクト (das Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texten aus Turfan-Funden)」を創始されたことは、東洋学研究者の周知するところである。ベツヒェルト教授の業績の第一は、これらのプロジェクトを引き継ぎ、多くのシリーズの編集・出版事業を推進されたことであろう。また1971年には、従来の「インド学研究所 (Indologisches Seminar)」という名称から、「インド学仏教学研究 (Seminar für Indologie und Buddhismuskunde)」に名称を変更し、名実ともにドイツにおける仏教研究のセンターであることをアピールされた。ドイツ文化圏の公的大学で「仏教学」という名称を使用した最初にして唯一の例ではないだろうか。

ベツヒェルト先生の研究業績については、1992年までのものについては、*Studien zur Indologie und Buddhismuskunde: Festgabe des Seminars für Indologie und Buddhismuskunde für Professor Dr. Heinz Bechert zum 60. Geburtstag am 26. Juni 1992* (Indica et Tibetica Bd. 22), herausgegeben von Reinhold Grünendahl, Jens-Uwe Hartmann und Petra Kieffer-Pülz (Bonn: Indica et Tibetica Verlag 1993), pp. 3–51, またそれ以降1997年までのものは、*Bauddhavidyāsudhākarah: Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday* (Indica et Tibetica Bd. 30), ed. by Petra Kieffer-Pülz and Jens-Uwe Hartmann (Swisttal-Odendorf:

Indica et Tibetica Verlag 1997), pp. 17–24に纏められているが、それらを見ていただければおわかりいただけるように、先生の研究分野や関心は非常に広いものであった。単に仏教の文献学的研究にとどまらず、仏教と土着宗教とのシンクレティズム研究のような宗教学的・民俗学的な研究、ヨーロッパの新仏教研究、マックス・ヴェーバー研究にも精力を注がれ、またテュービンゲン大学のハンス・キュング教授が中心となって、仏教、イスラム教、ヒンドゥー教との相互理解のために企画された連続講義では、仏教とキリスト教を担当されたが、これらの講義は書物にまとめられ、様々な欧米語に翻訳されて分野を超えた宗教理解に貢献している (Hans Küng, Josef van Ess, Heinrich von Stietencron, Heinz Bechert, *Christentum und Weltreligion, Hinführung zum Dialog mit Islam, Hinduismus und Buddhismus*, München: Piper 1984; ベツヒェルト先生とキュング先生の仏教に関する連続講義は第三部となっている)。

しかしやはり研究の中心部分は上座仏教の研究であったと言えよう。漏れ聞いたところではすでに学生時代から、スリランカや東南アジアの上座仏教国に赴いて写本や書籍を精力的に集めておられたそうである。研究所には先生が集められた膨大な量の資料があった。書籍も、スリランカやビルマで19世紀末～20世紀前半頃に印刷されたものが数多くあり、現在では入手困難なものも多くあったようである。先生の関心は、パーリ文献研究にとどまらず、中世スリランカのシンハラ語仏教文献やサンスクリット語文献の研究も手掛けられた。そのため、先生の上座仏教研究は文献学の枠を超えた総合的な視野を含んでおられた。また実際に行われている生きた仏教に強い関心を抱かれていたようである。その最初期の集大成が1966–1973年の *Buddhismus, Staat und Gesellschaft in den Ländern des Theravāda-Buddhismus*, 3 vols [上座仏教諸国における仏教, 国家, 社会] であろう。

授業や学生の論文指導では、特にシンハラ語文献、碑文なども扱われ、筆者を含む多くの学生にとって、中世シンハラ語資料の重要性を学ぶ機会となったことに、感謝している。上座仏教国のパーリ語以外の言語で書かれた

仏教文献研究は、パーリ研究、上座仏教研究の新しい地平を拓くものと思われるが、先生が蒐集され残された資料は今のところあまり活用されていないことが惜まれる。これらの資料の一部はウィーン大学に移管されたと聞いている。

ベツヒェルト先生は研究に必要な資金を得ることについてもなかなかの才能と実力の持ち主であった。例えば Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG) や様々な財団の委員を務められ、DAAD 奨学金、フンボルト奨学金などにも関わっておられた。ゲッティンゲンにはゲーテ・インスティトゥートがあり、外国からやってくる様々な分野のフンボルト奨学生はまず4ヶ月間ここでドイツ語を学ぶのであるが、その期間には必ずDFGを代表して、奨学生らを招き、立派な晩餐会を開いてホストを務めるのも、その仕事の一つであった。先生はこうした社交の場では、ヨーロッパの伝統の中で育った人らしい威厳と優雅さを具えた紳士としてふるまい、初めて会う分野外の研究者と歓談を楽しまれるような方であった。このDFGのプロジェクトとして、先生が多年の準備を費やして開かれたのが、1988年、ゲッティンゲン郊外の Hedemünden という風光明媚な場所にあるセミナーハウスで開かれた「仏滅年代論シンポジウム」であろう。発端は、ベツヒェルト先生が、欧米では通説として受け入れられてきた、南方仏教伝承に基づくブッダの生存年代論に対して、日本には宇井伯寿博士以来、北伝伝承を中心とする年代論研究があり、両者の間に約100年の開きがあることに驚かれたことだという。そのために、仏滅年代に関するあらゆる文献、研究や考古学的資料等を集め、様々な分野の研究者を一堂に集めて、この問題に結論を出そうという企画であった。このシンポジウムには平川彰先生はじめ多くの日本人研究者も招かれ、学生だった筆者は裏方としてそのお手伝いをさせていただいたことも、楽しい思い出の一つである。結局、決定的な結論は出なかったが、様々な資料の再検討や評価について異なった分野の研究者による研究発表・意見交換は大変活発で、参加者の受けた刺激は大きかったものと思う。このときの研究発表や資料集は3部からなる大著としてまとめられて出版された。このよ

うに、日本とヨーロッパという、伝統もやり方も異なる仏教研究者を近づけ、双方の研究成果を等価値に評価されたことも、先生の研究態度の広さと言えよう。また、資料収集の徹底ぶりも特筆すべき点であったと思う。

お忙しい先生であるので、授業は確かに休講が多かった。しかしとても楽しく、また勉強にもなったことは、様々なエクスカージョンの企画があったことである。鮮明に覚えているのは、ダールケ博士によって設立されたベルリンの「仏教の家 (Buddhistisches Haus)」を初めとする、ドイツ国内の仏教センターの訪問である。行く先々で、ドイツ人仏教徒や亡命チベット人、亡命ベトナム人の方々にお会いし、暖かく歓迎していただいた。多くの一般ドイツ人は、日本人がインド学や仏教学を勉強しに、なぜわざわざドイツに来るのかと訝しがらるが、ドイツの仏教は研究にとどまらず、自分の生き方として、仏教を選び取る人が、思いのほか多いということも、このような行事を通じて学ばせていただいた。ヨーロッパの現代仏教というものが、今や宗教研究の一分野にもなっているが、ベツヒェルト先生は、この分野の研究とフィールドワークにも大いに力を入れておられた。

最後に、普段のベツヒェルト先生と研究所の思い出を少しばかり記しておきたい。先生は朝9時頃には研究所にやって来られた。午前中はほぼ秘書のクチュマさんを相手に、多くの手紙への返事などを処理される。1989年頃にはパソコンがやっと導入されたが、先生ご自身はタイプライターも使われず、ペンをインク壺に浸して書くスタイルを最後まで続けられた。従って公的な文書は、先生の口述を秘書が速記し、タイプライターで仕上げ、先生のサインをもらうというシステムであった。ドイツ的な伝統的な慣習には忠実な方で、学生や研究員、掃除係の人に至るまで、**Sie** を使う丁寧な言葉で話された。学生や訪問者は、相談事があるときなど、必ず予約をする。このようなやり方はドイツでは当たり前のことではあったが、それにしても狭い建物の中で、秘書に電話等で予約を取るとするのは、日本人の感覚としては、最初は妙な感じがしたものである。昼休みは、ほとんど研究所の全員がキッチンに集まり、コーヒーを沸かして昼食を取る。その時間には先生の奥

様が先生のランチを持ってこられて、一緒に歓談しながら食事をするのが常であった。キッチンの恒例ランチタイムの他、海外からの訪問者や、所員の誕生日、先生ご自身の誕生日、その他の祝い事があると、教授室がたちまちパーティー会場になった。夏場の天気の良い時節は、庭で催されることも度々あった。日頃、厳しい指導を受ける学生も、研究員も皆和気あいあいと、持ち寄りの料理やケーキやシャンパン、ワインで楽しいひとときを過ごしたものである。余談になるが、今年94歳の高齢で亡くなられた Gustav Roth 先生は、私が研究所にお世話になったころはすでに引退されていたのであるが、ベツヘルト先生はそのようなお祝いごとには Roth 先生を必ず招待なさり、敬意を込めて遇しておられた。皆からグスタフ・ジーと愛称されていた Roth 先生は、大変弁舌の立つ方で、とりわけお祝いの席で披露する即興の賛美の辞は、ヨーロッパの伝統的教養とユーモアを感じさせる特別の味わいのあるものであった。また私の両親が、生涯最初で最後の海外旅行として、私を訪ねてゲッティンゲンに来たときは、通訳代わりに日本語科のフィッシャー教授ともども、ご自宅に夕食にお招きくださった。海外など初めてで、言葉もマナーも知らない両親なので、私は気恥ずかしかったが、礼節を重んじる先生の心遣いは、忘れられない思い出である。

ベツヘルト先生を褒め称えることは、筆先でいくらでもできよう。しかし本当の先生の姿を認めてこそ、真の哀悼となるのではなかろうか。ベツヘルト先生には、感情の起伏の激しいところがあり、先生と喧嘩別れしてしまった研究者が多いことも、実はよく知られている。筆者自身、「あなたは問題なくうまくやれたのか」と時々尋ねられることがある。筆者の場合は、だいたいにおいて良好な関係を保てたようである。先生の逆鱗に触れそうになったこともないではないが、やはり勉学と生活両面に亘って親身になってくださった恩を思うと、そこで感情に任せて喧嘩するのは大人気ないと思うのが、やはり日本人の故であろうか。博士論文の仕上げにあたって大喧嘩になってしまった、当時の中国人女子学生と昨年久しぶりに再会した。彼女は、その後の話として、ベツヘルト先生とある国際会議で出会い、食

事に招いて関係を修復したという話をしていた。彼女が、「ドイツ人は一旦喧嘩をすると絶対に相手を許そうとしない。でも私たちは東洋人であり、師に対する学恩というものを知っているから、和解することができる」と言っていたことが、とても印象的であった。日本的な表現で言えば、この彼女の言葉で先生も「浮かばれた」のではないだろうか。先生は心から人を憎むような方ではなかったことは、私も強く感じている。お気の毒なことに、退官近いころから重い病気に苦しめられ、かつての教え子や同僚の多くが研究所を去ってしまい、寂しい思いをされていたようである。逝去の知らせには、故人の遺志としてすべての弔問をお断りしたい旨が、奥様の名前で記されていた。35年間にわたり、ドイツのインド学仏教学の権威として君臨された先生は、実にひっそりとこの世を去っていかれたのである。しかし、ベツヒェルト先生の知遇を得た方々、学恩を受けた方々は日本にも数多くおられる。今一度、先生のありし日を思い起こし、先生のご冥福を共にお祈りしたい。

(2008年9月30日記す)